

少年の日二景

小川未明

青空文庫

おどろき

池いけの中なかには、黄色きいろなすいれんが咲さいていました。金魚きんぎよの赤あかい姿すがたが、水みずの上うえに浮ういたりまるい葉蔭はかげに隠かくれたりしていました。そして、池いけのあたりには、しだが茂しげり、ところどころ石いしなどが置おいてありました。

勇ゆうちゃんは、いかにも金魚きんぎよたちが楽たのしそうに遊あそんでいるのをぼんやりながめていました。そのとき、やぶの方ほうから垣根かきねをくぐって、黒くろい一筋ひとすじの糸いとのように、なにか走はしつてきたので、その方ほうを見みると、大おおきなへびが、一おぴきのかえるを追おいかけているので

す。かえるは、いまにもへびに捕らえられようと思いました。勇ち
やんは、考かんがえる暇ひまもなく、庭先にわさきへ飛とび降おりて、へびをなぐるう
と思おもつて、太ふとい棒ぼうを取り上あげたのです。この間あいだにかえるは、縁えんの
下したへ入はいろうとしました。しかしへびは執念しゅうねん深く逃にがすまいと
しました。

勇ゆうちやんは、力ちからいっぱいいたたきました。あわてていたので、棒ぼう
はへびにあたらずに、強つよく地面じめんをたたきました。するとへびは、
かま首くびを上げあげて、勇ゆうちやんをにらみました。勇ゆうちやんは、なんだ
か怖おそろしい気きがしたが、こうなつては、かえつてどうにかしなけ
ればならぬという気きが起おこつて、また力ちからを入いれてたたきました。
こんどは、へびの体からだにあつたので、へびは、飛とび上あがるよう

にして、そばにあつた一本ほんの小さな松まつの木きに、それは目めにも止とまらぬ早はやさで、くるくる巻まきついて、頭あたまを体からだの間あいだへ隠かくしました。これを見た勇ゆうちゃんちんは、あまり真しん剣けんな姿すがたに、気味悪きみわるくなつて、もうこのうえへびをいじめる気きにはなれなかつたのです。

「さあ、もうたたかないから、早はやくあつちへいけよ。」と、勇ゆうちゃんちんは、へびに向むかつて、いいました。

へびは、そのままの姿すがたで、身動みうごきもせず、じつとしていました。

「かえるは、どうしたろう。」と、見みると、これも、精根せいこんがつきはてたように、南天なんてんの木きの下したに、じつとしていました。

勇ゆうちゃんちんは、二ひきとも、かわいそうになりました。なんと

つても、人間にんげんがいちばん強いのだ。だが、へびがかえるを食たべようとしただけに、へびがわるいのだろうと、思おもつたのです。

「早はやくいきな、もうだいじょうぶだ。」と、かえるに、いいました。

かえるは、助たすけてもらつたのをありがたく思おもっているふうに見みえたが、いつのまにかいなくなりました。まだへびは、そのままじつとして細ほそい松まつの木きに巻まきついていました。

勇ゆうちゃんは、なんだか、いやな気きがして、早はやくへびも逃にげていってくれぬかと、遠とほくへはなれて、そのようすを見みていると、へびは、静しずかに、音おとをたてぬように、木きから降おりて、垣かきね根ねの方ほう向むかいました。

「ああよかった。」と、勇ちやんは、思いました。なぜなら、もしへびが池の中へ入ったら、どうしようかと思つたからです。そのうち、へびは垣根の横棒へはい上がり、その上を伝つて、やぶの方へ姿を消してしまいました。

「かえるを助けてやつて、いいことをしたな。」と、勇ちやんは、心の中で、喜んでいました。

晩方、お母さんといつしよに、町へ出ると、四つつじのところで、おじいさんがほたるを売っていました。

「まあ、大きなほたるだこと。」と、お母さんは、そのほたるの火が美しいのにびっくりなさいました。

「買ってね、お母さん。」

「すぐ、死にませんか。」

「だいじょうぶさ。」

そういつて、勇ちゃんは、五ひきばかり入れ物にいれてもらつて、帰りました。

その夜、池のあたりのしだの蔭に置くと、青白く燃える光が、池の水に映つて、それはみごとだったのです。

「昼間大きなへびが、かえるをのもうと追いかけてきたんだよ。」
ひるま
「昼間のことを、勇ちゃんは、家の人たちに語りましたが、思い出すと、ぞつとするような気持ちがありました。」

「へびは煙草をきらうといいますが、たばこの粉を、垣根のところにまいておくといいでしょう。」と、お母さんが、おつしや

いました。

「ほんとう？」

勇ゆうちゃんは、へびがくるのを防ふせげると知しって安あん心しんしました。

翌よく朝あさ、ほたるかごを見みると、一い匹ひきだけ、生いきて光ひかっている

だけで、あとの四し匹ひきは、死しんでいまいました。勇ゆうちゃんは顔かおの赤あかい

色いろが失うせてしましまった、死しんだほたるを見みて悲かなしくなりました。そ

して、残のこったほたるのたあめに新あたらしい草くさを代かえてやりました。日にち

中ちゆうは暑あつかつたので、草くさの蔭かげへ入いれてやりました。晚ばん方がたになる

と、その一い匹ひきもだいぶ弱よわつていたのです。

「やはりほたるは、だめなのかなあ。」と、勇ゆうちゃんは思おもいまし

た。生いき残のこった一い匹ひきをどうしたらいいかとお母かあさんに相そう談だんし

ました。

「池いけのほとりへ放はなしておやり。」

「お母かあさん、それがいいですね。」

勇ゆうちゃんは、ほたるをかごから出だして、池いけのあたりの草くさの葉はに止とめてやりました。ほたるは、いまさらのように大おおきな強つよい光ひかりを出だしました。ちようど遠とおくの清きよらかな空そらに光ひかる、お星ほしさまのようでした。このとき、それはじつに意い外がいのでき事ことでした。

ぱくりと音おとがしたかと思おもうと、やみの裡うちから出でたかえるが、そのほたるを一ひとのみにしてしまつたのです。

勇ゆうちゃんは、しばらく、悲かなしさも、腹はら立たしださも忘わすれてしまひました。

「僕ぼくが、へびをなぐつたのは、まちがっていたらうか？」と、いまさら自然しぜんに存ぞんするおきてというものが悟さとられたような気きがしたのでした。

伸のびるもの

良りょうちゃんは今いま中ちゅう学がくの一年ねん生せいです。ある日ひ学がっ校こうから帰かえると、お母かあさんに向むかって、「きょう山やまだ田たにあつたよ。」といいました。

「どうしていらつしやるの。」

「昼ひる間まは、会かい社しゃの給きゅう仕じをして、夜よる学がっ校こうへいつているといっ

ていた。」

「感心ですね。」

お母さんは、過ぎ去った日のことを思い出していられました。

それはまだ良ちやんが、小学二年生ごろのことでもあります。

事変前で、町には、お菓子もいろいろあれば、卵などもたくさん

ありました。

遠足の日がきまつて、いよいよその前の晩になると、おそら

く他の子供もそうであったように、良ちやんは大騒ぎです。

「お母さん、明日のお弁当は、おすしにしてくね。」

「ええ、してあげますよ。それとなにを持っていきますか。」と、

お母さんは、さも楽しそうにしている良ちやんに向かって、お問

いになりました。

「ゆであずきいけない？」

「そんなものを持っていく人はないでしょう。」

「じゃ、チョコレートとキャラメルとビスケットね。」

「そんなに持つていくのですか。」

「みんな僕、食べるんだよ。」

「果物はいいのですか。」

「なつみかんとりんご。」

「良ちゃん、遠足は、食べにいくところではありませんよ。」

「お母さん、早く買いにいきましょう。」と、良ちゃんは催促

しました。

「お仕事しごとがすんだら、つれていってあげます。」

新しんりよく緑いろの色は、だんだん濃こくなつて、どこの丘おかにも赤あかいつつ

じの花はなが盛さかりでした。また林はやしには、小鳥ことりが鳴ないていました。良りようち

やんたちの遠えんそく足は、そうした丘おかがあり、林はやしがあり、流ながれがあり、

池いけがある、そして電でんしゃ車のに乗のつていける、公こうえん園であつたのです。

良りようちゃんはまだ、まったく暮くれきらぬ外そとへ出でて遊あそんでいまし

た。夜よるの空そらには、金きんいろ色の星ほしが輝かがやいていました。良りようちゃんは、往お

来うらいの上に立たつて、じつとその星ほしの光ひかりをながめていました。

「あの星ほしは、明日あした僕ぼくたちのいく、公こうえん園の森もりや林はやしの照てらしている

のだろう。」

そう思おもうと、その星ほしがなつかしく、また公こうえん園の森もりや林はやしをある

ところは、たいへん遠いところのような、またおもしろい場所の
 ような気がして、なんとなく胸がおどるのでありました。

「お母さん、早くいかないの。」と、良ちゃんは、お家の中をの
 ぞいて、いいました。

「ええ、もうすぐですよ。」

お母さんは、やっと夕ご飯の後片付けが終わって、良ちゃん
 をつれて、市場へいかれました。

そこには、同じ年ごろの子供たちが、やはり明日の遠足に持
 っていくものを買っているのでありましょう、お母さんにつれら
 れてきたもの、また、お姉さんにつれられてきたもの、幾人と
 なくおりました。

「さあ、好きすなものをお買かいなさい。」と、お菓子屋かしやの店先みせさきで、どこかのお母さんかあが、やさしく子供こどもにいつていられるのもあります。

「あの子こ、良ちゃんりょうのお友だちともでない。」

「僕ぼく、知らないよ。きつと、ほかの組ぐみだろう。」

良ちゃんりょうは、りんごも二つといえ、みかんも二つといつて、

お母さんかあをおどろかせました。

家いえへ帰かえつてから、お菓子かしや、果物くだものをランドセルにつめるとき、

そばで見てみいたお姉さんねえが、

「良ちゃんりょう、そんなもに持つもていつてどうするの？ 良ちゃんりょうは食く

いしんぼうといつて笑わらわれてよ。」といわれました。

学校がっこうで、良りちゃんのかたわらに、紙かみや、鉛筆えんぴつを先生せんせいから
 もらっている子供こどもがいました。その子このお父とうさんは、病び氣ようで臥ね
 ており、母はは親おやは、小ちいさな妹いもうとをつれて、毎まい日に車ちまを引ひきながら、
 くずをか買いいに、出でかけているときいていました。
 それで、遠えん足そくのときには、良りちゃんようは、二ふた人たり分ぶんのお菓かし子しと
 果くだもの物ものを持もつていこうと思おもつたのでした。
 そのことりが、良りちゃんようの口くちから、お母かあさんや、お姉ねえさんにわか
 ると、

「はじめからいえば、お母かあさんは、なんともいわなかつたのです
 よ。」と、お母かあさんは、いわれました。

「僕ぼく、そんな友ともだちのこと、いいたくなかつたんだもの。」

「なんとというお子さん。」と、お姉さんが、きかれました。

「山田つて、いい子なんだよ。」と、良ちゃんは、答えました。

二人は、その後学校で、仲のいいお友だちとなつたが、その

ときのこと、いまお母さんにも、良ちゃんにも思い出されたの

です。そして、なお残念に思われたのは、あの遠足の日に山

田まだがついにこなかつたことであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

初出：おどろき「台湾日日新報」

1940（昭和15）年8月4日

伸びるもの「台湾日日新報」

1940（昭和15）年8月6日

※表題は底本では、「少年《しょうねん》の日《ひ》二景《けい》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年の日二景

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>